

お伽草子の美人描写

—女を描く／女が読む—

染谷 裕子

1. はじめに—お伽草子の美人描写 三つの方法とそのルーツ

これまで室町時代から江戸時代初期に作られたお伽草子、別名中世小説、室町物語などと呼ばれる作品群を対象に日本語史の立場から研究を続けてきた。ここでは、その積み重ねの中から、このお伽草子の表現上の特徴の一つである、美人を描写する類型表現を取り上げ、今回のシンポジウムのテーマである「女を描く」「女が読む」という視点から、この表現について考えていきたい。

まずはじめに、この美人を描写する類型表現とはどういうものか、ざっと確認しておきたい。市古貞次(1955)は、この美人描写の類型表現を「光る・輝くを以てする」方法、「自然、月、花に喩へる」方法、「日本・外国の古往今来の美人に喩へる」方法(これは「たとえる」というより、それ以上に美しいというのが定番)の三つに分けた。お伽草子で美人を描くにはこの三つの方法で大体おさまるといえる。

以下、①②③として三つの方法の用例をあげる¹⁾。なお、()内は、染谷(2008)でこれらの表現を分析したときに使った呼称である²⁾。

く」「玉」の類)

・としのほと、十六七はかりと、おほしきひめきみ、あたりもかゝやくやうなるか、たゝひとり、もくつをたきいたり《49 いわや》

・かしまの大くうしの、ざうしき、ふんせうと申物こそ、子を、もたざりしか、大みやうしんへいのり申、ひかるやうなる、むすめをもちて候《355 文正草子》

②「自然、月、花に喩へる」(花鳥風月を以てたとえる)

・しらゆきのはたへ、すぎとをり、玉のかんさし、ゆりかけて、らんしやのにほひ、かうはしく、さかのゝはらの、をみなへし、露をもけなる、ふせいして、ゆるきいてたるありさま、なにしておふ風月、けにもとおもはるゝはかりなり《92 花鳥風月》

・としのほと、十四五はかりに、おほえて、あひきやうつきて、すかたをみれば、はるの花の、さきみたれて、いろかもともに、にほひわたるに、ことならず、かたちは、あきの月の、山のはを、ほのかにいつる、心ちして、糸にかくとも、ふてにも、をよばす《358 ふんしやう》

①「光る・輝くを以てする」(「光る」「輝

③「日本・外国の古往今来の美人に喩へ

る」（古来の美人にたとえる）

・ほとなく、十三にならせたまひければ、いよ／＼、みめかたち、うつくしく侍れは、たうのやうきひ、かんのりふしん、わかつてうには、そとほり姫、おのゝこまちなとも、これにはいかて、まさりなんとそ、人々申あひける《90 かざしの姫》

・それ、むかしのやうきひ、りふしん、そとおりひめとやらんも、このひめきみにはよもまさしとそ、おほえける《239 千手女》

これらの美人描写の三つの方法は、実はお伽草子が新たに作り出した表現ではない。どの方法も出発点に違いはあるが、お伽草子より前の時代から見えている表現である³⁾。

①の「光る」「輝く」の類は、上代より見え、最も伝統的な方法である。

・此子光華明彩、照徹於六合之内（此の子、光華明彩しくして、六合の内に照徹る。）《日本書紀・神代上》

・かぐや姫の家に入りたまふて、見たまふに、光満ちてけうらにてゐたる人あり。《竹取物語》

・（俊蔭女ハ）十二、三になる年、容貌更にいふ限りなし。あたり光り輝きて、見る人まばゆきまで見ゆ。《宇津保物語・俊蔭》

・いよいよ光をのみ添へ給ふ御かたちなどの、この世に見えぬ心地して《源氏物語・行幸》

・光るやうなる御容貌はさるものにて《中世王朝物語・苔の衣》

最初の例は天照大神の神性を表現したものである。従って、これらは単なる美

人描写ではないという指摘が多くなされている。たとえば、湯原美陽子(1988)は「主人公達はそれぞれひとつの宿命のもとにこの世に生まれ、その光り輝く美しさは、その宿命を果たす内面的な精神力、性質とひとつであり、将来の運命を暗示している」とし、藤田加代(1980)は、『源氏物語』の中では、「光る」「輝く」が「その主人公たちのまばゆく発現する超人性を表すもの」であり「目もあやな光彩美であり、まばゆいほどに高貴で華麗な美」とする。

②の「自然、月、花に喩へる」の類では、たとえば、植物のイメージで容姿美を表現する方法がある。早く『宇津保物語』に見えるが、山口仲美(1984)によれば、これを駆使して独特の容姿美を作り上げたのは『源氏物語』だという。「容姿容貌をも含めた人柄全体に対する直喩」であり、登場人物を描き分けるために、「あらゆることを計算して、入念に作りあげた」表現方法と指摘する。

・女御の君は、同じやうなる御なまめき姿のいま少しにほひ加はりて、もてなしけはひ心にくく、よしあるさましたまひて、よく咲きこぼれたる藤の花の、夏にかかりて、かたはらに並ぶ花なき朝ぼらけの心地ぞしたまへる。《源氏物語・若菜下》

・紫の上は、葡萄染にやあらむ、色濃き小桂、薄蘇芳の細長に御髪のためれるほど、こちたくゆるるかに、大きさなどよきほどに様体あらまほしく、あたりにほひ満ちたる心地して、花といはば桜にたとへても、なほ物よりすぐれたるけはひことにものしたまふ

《源氏物語・若菜下》

ただ『源氏』以降は盛んに使われる用法ではあるが、『源氏』の模倣に終わってしまう場合が少なくない。登場人物を描き分けるというレベルには達していない。

・(中ノ君ハ) 秋の風に吹きみだる刈萱の上の露乱れ散りつらむ気色したりつるこそ、らうたさはまづ思ひ出でらるるに《夜の寝覚・巻一》

・(山里ノ姫君ハ) 唐撫子の五月雨にしをれたる夕映えの心地して《中世王朝物語・小夜衣・上》

・(姫君ハ) まことに女郎花も風にまよび、撫子の露に濡れたらんよりもあはれにうつくしう見奉る《中世王朝物語・木幡の時雨》

③の古来の美人にたとえる方法は、谷口耕一(1996)によれば、楊貴妃、李夫人にたとえる表現は『和漢朗詠集』巻上・源順の「楊貴妃帰唐帝思 李夫人去漢皇情」に由来し、『雑談集』を最も早い例とする。鎌倉時代以降の用法とみてよい。『平家物語』で言えば、当初は覚一本のように楊貴妃や李夫人の故事を引きつつ喩えていたものが、長門本のような「楊貴妃、李夫人もかくや」という形になっていったものと思われる。

・古ノ楊貴妃、李夫人ノ兒ト申、カヲフシ、蓮ノマナジリモ、我子ニハマサラジト思《雑談集・巻四》

・かゝりし程に、中宮は月の重なるに随て、御身をくるしうせさせ給ふ。二たびゑめば百の媚ありけん漢の李夫人の、承陽殿の病のゆかもかくやとおぼえ、唐の楊貴妃、李花一枝春の雨をおび、芙蓉の風にしほれ、女郎花の露お

もげなるよりも、猶いたましき御さまなり。《平家物語・巻三「教文」》

・むすめ一人ありけり。おやににたる事なれば、せいたいのまゆつきあひあひしく、ひすいのかんさしたけにあまれり。ふようのまなしりけたかくして、りうはつ風にけつれる粧ひ、やうきひ、りふしんも、かくやとおぼえたるに《長門本平家物語・巻十「文覚房発心因縁事」》

2.「女を描く」という視点から見た美人描写——美人像の固定化

さて、以上の三つの方法について、染谷(2008)はお伽草子では具体的にどのよう¹⁾に用いられているか、詳しく分析した。

まず、①の方法については、貴人性、超人性を表すという特性が感じられる例もあるものの、前代ほど効果ある表現ではなく、生まれたばかりの赤子に使うなど対象や場面に限定される。どちらかという²⁾と、お伽草子の読者にとっては、美人描写としては②や③の方法がインパクトが強かったと思われる。

次に②の方法であるが、漢籍・仏典・『源氏物語』など、様々なところから表現を借りてきて、それらを適当に組み合わせりメイクして「似ていて非なる」表現を作るのがお伽草子の特徴である。ただし、さまざまな素材の中から用いられるものが集中してくる。よく使われる表現は10程度である。

すなわち、「花の顔ばせ」「花の姿」「雪のはだえ」「丹花の唇」「芙蓉のまなじり」「蘭麝の匂い」「翡翠のかんざし」「宛転たる双蛾」「秋の蟬の羽」「花にねたまれ、月にそねまれ」「柳・風・靡く」「女郎花・露おもげなる」「山の端を出る月」「姿を申せ

ば春の花、形を申せば秋の月」という表現である。

そして、③の方法であるが、実は「○の本地」などと名前がついた神仏の人間時代の物語や、擬古物語系の作品にはほとんど見られない。代わりに本地物は「天人の影向もかくや」を、擬古物語は「ただ人と思はれず」を用いる。これらは、「この世の中ではあったことのない」美人という視点において共通しているが、その発想の時代背景が違うことによるのではないかと指摘した。すなわち、「ただ人と思はれず」は中古の、「天人の影向もかくや」は中世前期の、「楊貴妃・李夫人と申すともいかでかこれにまさるべき」は中世後期のとらえ方なのではなかろうかとした。

さらに、以上の三つの方法を見ていくと、②や③の類に属する表現は、さらに、いくつかのキーワードによって表される表現に集中する。すなわち②に属する表現は、「柳・風・靡く」によって（髪・姿）を表すパターン、「翡翠のかんざし」、「女郎花」と「露重げなる」の組み合わせ、以上の三つに特に集中していく。一方、③の類には様々な美人が登場するが、結局は、楊貴妃・李夫人・小町・衣通姫に集中していく。そして、これらを「たをやかな姿と黒く長くつややかな髪」といった「室町時代の嗜好の表れ」と染谷(2008)では結論づけたが、ここではこれらをさらに「女を描く」という視点から考えてみたい。

これらの表現は、どちらかというとな女性中心の表現である。このことはあたり前のようであるが、前代までは、男性にも使われていた。次の例は、光源氏、平

維盛、牛若時代の義経をそれぞれ描写したものである。

- ・いかでかくとりあつめ柳の枝に咲かせたる有様ならむ、御ゆゆし。《源氏・薄曇》
- ・露に媚びたる花の御姿、風に翻る舞の袖、地をてらし天もかかやくばかりなり。《平家物語・卷十「熊野参詣」》
- ・きはめて色白く、鉄漿黒に、薄化粧して眉細くつくりて、衣引きかづき給ひたりければ、姿松浦作用姫が領巾振る山に年を経て、寝乱れ髪の際より、乱れて見ゆる黛、鶯の羽風にも乱れぬべくも見え給ふ。玄宗皇帝の時ならば、楊貴妃とも言ひつべし。漢の武帝の世なりせば、李夫人かとも疑はる。《義経記・卷二》

しかし、お伽草子では決まり文句を使ってまで男性の容姿美を描くことは少なく、主に女性の容姿美が描かれる。『室町時代物語大成 1～13』収載の417 伝本中、3 種の表現が一つでも見られるものが261 本ある。このうち171 本で女性に用いられているが、男性は63 本に過ぎない。しかもそのうち23 本は、男性の恋愛対象になっている稚児である。なお、88 本で乳幼児に用いられるが、これらは①の方法に限られる。

なお、③の表現は、女の場合「美人ぞろえ」として美女がたくさん登場するが、男の場合は管見では最高4 人である。

- ・物に、よく／＼たとふれは、によさんのみやの、たちすかた、おほろ月夜の、なひしのかみ……ひしんにとりては、いつみしきふに。こしきふ、まつらさよひめ、たまものまひ、たうの、やうきひ、そとおひめ、とはのいん

のきさき、そめ殿のきさき、くわんおんのいもふとに、せいしこせん、ひしやもんのいもうとにきちしやうてんによに、くわようふに(ん)⁴⁾、わかつてうに、おのゝこまちと申とも。これにわ、いかて、まさるへき《209 浄瑠璃十二段草子》

・なりひらのちうじやう。ひかるげんじの大しやう。かしわざのゑもんのかみ。にわひひやうふきやうのみやと申とも。これにはいかて、まさるへき。《365 判官みやこばなし》

一方、典型的な美人表現は、もっぱら外見的なイメージ美を表すものであり、前代のような人格をも含めた総合的な美を描くことに、お伽草子では力を入れていない。主人公は、まず「みめ」「かたち」「顔ばせ」「容顔」などの言葉で表される「容姿」の描写に最も力が注がれる。次に「ざえ」「才知」「才覚」「利根」「芸能」などの言葉で表される、教養・芸能。「和歌」や「管弦」について具体的にくわしく表現することもある。そして「心ばえ」「心ざま」「なさけ」などで表す人柄については三番目である。その後もくりかえされる「みめかたち」の美しさの説明と異なり、「心ざま」の方は「容顔美麗、心ざま、才覚にすぐれ」の人物の最初の紹介の一言で終わってしまい、多くは二度と出てこない。

湯原美陽子(1988)は「(王朝物語の)完全な美の姿は「かたち」と言われる外見上の美と、「心魂」と言われる内面性、そして「才」の三拍子が揃って始めて理想的に見られているので、この三者を切り離して見る意識はないのである。従って容姿美を考えるに当たってはこれらも合わせ

て考える必要があるわけである」とする。こういった王朝の三拍子揃った総合的な美とは異なるのである。お伽草子の世界では、特に女性主人公に最も重んじられるのは「かたち」、次に「才」、そしてその次に「心」なのである。次の「鉢かづき」の例を見ると、『源氏物語』の表現を引用しながらも、そこには『源氏』に駆使されたような「容姿美+人格美」のような総合的な美は感じられない。市古貞次(1955)も、「次にさうした人間の性格が、どのやうに書き表されてゐるか、性格描寫については考へてみると、作者は殆どさういふ點に、筆を費やしてゐないことに気づくであらう」と指摘する。

・此はちかつきの、ふせいを、よくよく、物にたとふれば、やうはいたうりの、花のもと、くもまの月のさしそひて、きさらき半のは、いと柳、風にみたるゝ、よそおひ、まかきのうちの、なてしこの、つゆをもけなる、ふせいして、ものよわく、はつかしけにて、うちそはみたるかほ(の)⁵⁾、あいきやう、いつくしきは、たとへ、やうきひ、り(ふ)ちんも、これにまさるへき《311 鉢かづき》

さて、以上のお伽草子の美人の類型表現から「女性はまず外見。長いつややかな髪と姿態のやわらかさ。男を虜にする女。」というイメージが出来上がる。この時代の狂言等に描かれた「わわしい女たち」と全く異なる方向である。これがお伽草子の美人像である。

なお、この外見的嗜好は、平安時代や鎌倉時代とも共通する面もある。ただ、それは男女ともに求められた美である。この美をお伽草子の時代に女性にだけ適

用させたことが、結果的には、女性のイメージを固定することになってしまったのかもしれない。

3.「女が読む」という視点から見た美人描写——女訓書との関わり

次に、女訓書との関わりから、類型表現について考えていきたい。お伽草子の製作とほぼ時代を同じくして、女性に対する教訓書、女訓書が登場する。

中世の女訓書としては、『庭のをしへ』、穂久邇文庫本『女訓抄』、天理本『女訓抄』、『めのとのさうし』、『身のかたみ』、『仮名教訓』などがあげられる。美濃部重克(1992)は、中世の女訓書を大きく二つに分け、「王朝物語との関わり方」から「王朝物語を内なるものとする精神で書かれた」(天理本『女訓抄』の系統)ものと「王朝物語を外側に位置するもの」(穂久邇文庫本『女訓抄』の系統)とした。美濃部重克・榊原千鶴(2003)によれば、天理本『女訓抄』は礼法や作法、心構えなどの話題が中心で「上流の限られた世界の女性の生活に密着したところで発想された」女訓書であり、穂久邇文庫本『女訓抄』は仏教および儒教の思想を背景に多くの和漢の説話を引用し「女性に向けての啓蒙的教訓を目指した書」であるという。

実は、この前者の系統に、件の美人描写の類型表現がちらりと入り込んでいる⁶⁾。

・しも月一日、いとやすらかに、ひめきみ、うまれたまへり。なにのつゝましさもわすれて、とりあけ、みたてまつるに、うつくしさ、たくひなき。たまのひかるなどは、かゝるをいふにこそと、おもふに(天理本女訓抄・序)

作者は序でこの書が六十を越えてから

産んだ自分の娘に書き残す目的であることを述べるが、娘誕生に至るまでの経緯を物語風に語り、お伽草子の美人類型表現(美しい赤子誕生の決まり文句)をさりげなく取り入れている。これは何らかの意図あつてのことではないか。

次は『身のかたみ』である。眉の作り方という実用的な説明の中に美人の類型表現を用いている。

・まゆはたうのやうきひ。げんそうくわうていのきさき。はゝのはらにやどらんとせし時。はゝの夢に柳のつゆをのむと見て。やがてくわいにんして。やうきひをうめり。このやうきひたぐひなきびじんにて。みかどの御おぼえならびなかりしかば。さいはひのほどをうらやみて。柳の糸のみだるゝ時、す糸の葉ふたつひらくるを。やなぎのまゆといふ。それをまなびてまゆといふ事はつくり侍り。さればかたじけなくも。天照大神は女たいとして。日月ひかりあきらかなるをまなびて。三日月をいたゞき給ふ。ほそやかにいつくしう。山のはいづる月のごとく。露をふくめる花のかほばせ。あをやぎのまゆのごとくつくらせ給ふべきものなり。あひかまへて、たゞがほにて人には見え給ふまじきものにて候。女ばうと申ものは。おほかたつくりものにて候。さてこそまろこしにも。花女柳男とはもちひて候へ。おとこはそのすがたつくりせずしてよきをほんとし。女ばうはつくりてよきをほんとし候。たゞうつくしう御さた候べく候。《身のかたみ》

上の例で、実は「ほそやかにいつくしう」の後は「あをやぎのまゆのごとくつく

らせ給ふべきものなり」と続けばよいのであって、美人の類型表現である「山のはいづる月のごとく。露をふくめる花のかほばせ」はなくてもよい部分ではないだろうか。そして、この類型表現の後に「あひかまへて、たゞがほにて人には見え給ふまじきものにて候。女ばうと申ものは。おほかたつくりものにて候。」(決して素顔ではいけない、女は作るものだ)という過激な発言、しかしながら最も言いたい部分がでくる。

このような文脈上、なくてもよいところにある美人の類型表現は他の女訓書にも見える。

・慈悲の心ありて。人あはれみ。虫けだものゝうへまでも。露のなさを。かけまくもかたじけなくし給ひ。おもてはたゞ楊柳の風になびき、春の雪の梅の梢につもるがごとく。物やはらかにして。人のおもひをしり。ひがめる心をゝし直し。さて又心のうちは。石やかねなどよりもかたく。あだなるふるまひ。はしかなる事をきらひ。一すぢに心をむけたまふべきにて候。賢臣二君につかへず。貞女両夫にまみえずとのことはりを。朝夕心にかけて給はゞ。神や仏のまもりめもおはしまし候べく候。《仮名教訓》

下線の部分はなくてもよい。「おもては」「物やはらかにして」でいいはずである。そして、やはりその直後に強い口調の教訓が述べられている。

次は、江戸時代成立の女訓書ではあるが、同様に類型表現を使っている。下線部はなくても通じる。下線部の直前に「しければ女とむまれては、一日もおしろいをぬらず、すがほに有へからず」と強い

教訓が見える。

・白粉といふ事は、もちこしにては秦の穆公のはじめてつくり出して、むすめの弄玉にぬらしめ給ふ。わが朝にては、持統天皇のとき観成といふ人はじめて作り出して、天皇これをぬり給ふ。さればおしろいをぬる事、女のさだまれる法にしていりどりかざるためばかりにあらず、祝義にたつなり。うれひ有ときはおしろいをせぬゆへなり。しければ女とむまれては、一日もおしろいをぬらず、すがほに有へからず。もちこしにては楊貴妃・虞氏君、わが朝にてはそとおり姫・小のゝ小町をはじめて、むかしの名たかき美人たちみなおしろいをけわい給ふ事、詩にも歌にもみへたり。いわんやつねの女をや。なるほどこまかなるおしろいをうす／＼として、よくぬぐひとり給ふべし。白／＼とぬりて耳のあたり鼻のわきにむら／＼とのこりたるは、うたてなものなり。白粉にかぎらず、紅なども頬さき・口びる・爪さきにぬる事、うす／＼と有べし。こくあかくはいやしく、茶屋のかゝにたとへたり。濃きにあかぬ物は齒黒なり、くろ／＼と毎朝つけ給ふべし。《女重宝記・一》

ただ、これらの類型表現は何箇所も出てくるわけではなく、実はそれぞれの女訓書で1箇所だけである。したがって、当然、無意識の混入とも考えられる。その場合は、作者が「お伽草子に慣れ親しんできた」あるいは「お伽草子を創作に関わっていた」などと考えられるかもしれない。

しかし、私は先に指摘したように、強い口調の前後に、なくてもよい表現を入

れているところに注目したい。そして、実は美人の類型表現が、お伽草子に慣れ親しんだ読者を誘いこむ、あるいは教訓的内容を和らげる効果をもたらす、理想の美人像に近づけるかもしれないと思わせる、などという意図をもった意識的な表現と考えてみたい。

4. まとめ

語って聞かせる文芸でもあったお伽草子にとって、美人の類型表現は聞かせ所でもあった。そして、素朴な読者や聴衆にとって歓迎すべき表現であったはずである。最初は細かい意味もあいまいなまま口調を楽しんでいた表現が、何度も目(耳)にするうちに、後に実質的な意味を持って読者や聴衆に浸透していく。具体的な容姿までは明らかではないが、長く流れるような髪、やわらかい姿、男を虜にする女といった漠然とした女のイメージが植えつけられていったのではないだろうか。

当初これらの表現は王朝的な美意識を源とするものであって、女に対して特別な意図があったわけではなかったかもしれない。しかし、結果的には女の地位が急激に落ちていくこの時代にとって大変都合のよいものとなったのではないだろうか。

脇田晴子(1982)は「女性の労働や活動は、中世末期の十六世紀には、家支配のなかに包含され、内助の功として生きるか、体制外の底辺の活動として生きつづけることになる。・・・女性の存在価値は母性のなかに追い込まれていった。しかし、中世後期から近世にかけては、事態はもっときびしくなり、「腹はかりも

の」という考え方もうまれてきた。」と述べている。

類型表現は女たちの目を社会から、男に相対するものとしての性へとそらしていく。一方、女たちにとって、なじみのあるこの類型句が「女訓書」に挿入されることによって、その不合理な内容⁷⁾にさえも目を曇らせることになったのではないか。

以上のことから、お伽草子の美人描写は、女を規格化し、不合理な役割分担に迫りやることに、はからずも一役買ったのかもしれない、このように結論づけたい。

参考文献

- 谷口耕一(1996)「四類本平治物語の文章と室町文芸」(『語文論叢』23、1996.1)
美濃部重克(1992)「テキスト・祭り　そして女訓—お伽草子の論—」(『国語と国文学』69-5)
市古貞次(1956)『中世小説の研究』東大出版会
脇田晴子(1982)「中世における性別役割分担と女性観」『日本女性史　中世2』東大出版会
湯原美陽子(1988)『王朝物語文学における容姿美の研究』有精堂
藤田加代(1980)『「にほふ」と「かをる」』風間書房
山口仲美(1984)『平安文学の文体の研究』明治書院
美濃部重克・榊原千鶴(2003)『女訓抄(伝承資料文学集成第17輯)』三弥井書店
染谷裕子(2008)『御伽草子の国語学研究』清文堂

注

- 1) お伽草子のテキストとしては『室町時代物語大成』1～13および補遺1・2(角川書店)を用いる。ただし、数量的に扱う場合は本編417作品に限る。『大成』は同一作品の異なる伝本をも掲載し、また、お伽草子というより、鎌倉時代物語あるいは仮名草子と呼んだ方がよい作品も若干含む。用例中の番号は、『大成』の作品番号を示す。
- 2) 基になる拙稿は以下の3本であるが、これらは染谷(2008)に改稿後、掲載したので、これら以後については「染谷(2008)」とまとめて表示する。
「御伽草子における美人描写 古来の美人にたとえる表現」(『調布日本文化』7、1997.3)
「御伽草子における美人描写(二)『光る』『輝く』『玉』をめぐる」(『調布日本文化』8、1998.3)
「花鳥風月を以てする美人描写 御伽草子の場合」(『調布日本文化』9、1999.3)
- 3) 以下、お伽草子以外の用例本文は、次のテキストを除き、『新編日本古典文学全集』(小学館)による。
『中世王朝物語全集』(笠間書院)、『長門本平家物語』(勉誠出版)、『雑談集』(三弥井書店)
- 4) 本文は「う」とあるものを「ん」と訂した。
- 5) 本文は「を」とあるものを「の」と訂した。
- 6) テキストは以下の通り。
「天理本女訓抄」『伝承資料文学集成 第十七輯 女訓抄』所収(三弥井書店)

「身のかたみ」『群書類従 第二十七輯』所収(続群書類従完成会)

「仮名教訓」『続群書類従 第三十二輯下』所収(続群書類従完成会)

「女重宝記」『糸入 女重宝記 上 本文編』(東横学園女子短期大学女性文化研究所叢書三)』

- 7) 「王朝物語を内なるものとする精神で書かれた」女訓書をこのように解釈すること自体に無理があるかもしれない。ただ、美濃部重克(1992)によれば、「身のかたみ」「めのとのさうし」などはもう一方の「王朝物語を外側に位置する」女訓書にも近づいているという。

(田園調布学園大学)